

# 「日本の土壌から出てきた近代人」の思想Ⅱ —中内功『わが安売り哲学』（1969）を再考する—

Nakauchi Isao

—Modern ("kindai") Thought Emerging from Japan's Spiritual Climate Ⅱ—

篠崎尚夫（しのぎ たかお）

## 目次

はじめに

### 1 中内の「流通革命」観

- (1) 長幸男の「中内功評」と『わが安売り哲学』の構成
- (2) 「わが安売り哲学（抄）」

### 2 中内の「思い」と「想い」

- (1) 「鬼」への「思い」
- (2) 「鬼」の「想い」

### 3 「野火」の思想—中内功『流通革命は終わらない』（2000年）—

おわりに

## はじめに

筆者は、以前「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想—本田宗一郎と居残り佐平次（映画『幕末太陽傳』）—」（2014年3月、以下、「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ」と略す）という論文を書いた。その中で、「『日本の土壌から出てきた近代人』の理解とされれば、やはり『戦争』という体験が高度成長期『日本のビジネスマン（単に株主資本家や重役たちではなく、およそ経済組織に帰属する人々）の思想というものの中に探れる』ところの『意識・無意識に行動している基盤』（≒内面的生活態度）、ということになる。（中略）より正確に言えば、『戦勝に続く敗戦』という『新しい組合せ体験』が、日本の土壌に、時代を画する個人主義的、合理的な『近代人』を創ったということである」<sup>(1)</sup>と論じた。

これは、長幸男が「私は、われわれが意識・無意識に行動している基盤というものに興味があるのです。そういったものが日本のビジネスマン（単に株主資本家や重役たちではなく、およそ経済組織に帰属する人々）の思想というものの中に探れるのではないかという気がするのです。たとえば、本田宗一郎という人がいましたが、彼の書いていることや話していることはまったく巷の職人のおじさんが話をしているような調子ですけれども、その含蓄するところは実に合理的で、私は近代の合理的な倫理体系とつながる——表現

が正確ではありませんが——ものがあると思います。ソニーの井深大と親友であった本田宗一郎という人は、日本の土壌から出てきた近代人だという気がします<sup>(2)</sup>と語っていたことに由来する。

殊に、「本田宗一郎という人は、日本の土壌から出てきた近代人」という、長の言葉に触発され、筆者は、上の『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰを書いたのである。

その際、長が編纂した『実業の思想』（現代日本思想体系11）<sup>(3)</sup>と『経済の思想』（戦後日本思想体系8）<sup>(4)</sup>に関連させて、「『実業の思想』の⑧松下幸之助「私の行き方考え方」（1954年）、『経済の思想』の⑧中内功「わが安売り哲学（抄）」（1969年）には、本田との『近似性』を感じるところがある。殊に中内のそれには強く感じる部分がある。中内、そして松下…、さらに加えて堤清二等々についても、機会があれば、順次論じて行きたい<sup>(5)</sup>と、筆者は注記していた。

このことを念頭に置きながら、本稿においては、中内功（そして功）、彼の脳裡に「焼き付いた想い」と（そこから）「浮かび来し思い」について、言い換えれば、「想い（過去）」に裏打ちされた「思い（未来）」という意味での、中内の「思想」に関し、彼の単著『わが安売り哲学』を踏まえ、考察していくことにする。

## 1 中内の「流通革命」観

### (1) 長幸男の「中内功評」と『わが安売り哲学』の構成

前掲『経済の思想』の巻頭（「解題・対談 戦後経済の思想」）において、長は、中内功について、以下のように述べている。

中内さんの文章（『わが安売り哲学』の文章を指す—引用者）にしても、「細胞」とか「毛沢東」とかいうことばがとび出す。これは、おそらくマルクス主義者からいわせると、とんでもない誤解であるとか、乱用であるとかいう評価を受けるかもしれないけれど、しかし、思想というものは、元来、誤解に値するようなものでなければ古典性をもたないのであって、自分たちの問題を解決していくために自由に誤解し、自由に援用していくということが、実は個々人の人間のもつ思想というものの生きたおもしろさだと思いますね。<sup>(6)</sup>

『わが安売り哲学』でおもしろかったのは、流通の解釈。流通と価値の問題については、マルクス自身、かなり曖昧な個所があるように私は思うのですけれども、中内さんは、流通の生産性ということ、価値形成ということを強調している。私はこれは妥当だと思うのです。とくに今日、市場が非常に広がって、たとえば宮崎県の野菜が東京で食べられているという状態ではね。その流通過程にはさまってくるさまざまなコストを合理化することが、はなはだ生産的な問題だということに着目している。

これは消費者の側からの新しい市場問題に対する接近だと思うのです。<sup>(7)</sup>

対談者の伊東光晴も、次のように付け加えている。

中内さんは、価格はわれわれが作るんだ、消費者が作るんだという。消費者主権の考え方を背景にしながら、メーカー、特に寡占化してくるメーカーに対する対抗力を打ち出そうとする。こういう考え方はこれが初めてなのじゃないでしょうか。ガルブレイスなどが対抗力ということを言っている。独占に対してもっとも効果があったのは対抗力であると。アメリカにおける流通過程の中に生れてくる大販売組織が成立するためには安売りをせざるをえず、そのために大量に安く仕入れる。これが大企業、大寡占メーカーに対する対抗力を形成する。それと同じものが、発生した。しかも、これが国家の何の保護も受けていない。しかし、経済合理性をもって、これが戦後資本の中に、だんだん巨大な力となっていき、銀行もこれを無視できなくなってきたというところがおもしろいのです。<sup>(8)</sup>

中内の『わが安売り哲学』（日本経済新聞社、1969年）には、6つの「大見出し」があり、それらの内に、それぞれ幾つかの「小見出し」がついている。便宜上、「大見出し」には「第一章～第六章」を付し、「小見出し」には「第1節～第10節」を付して、『わが安売り哲学』の目次を見ていくことにする。<sup>(9)</sup>

第一章「めざすは消費者主権」は、第1節「忘れられぬ感動」、第2節「ダイエー憲法」、第3節「消費者は王様か」から成っている。

第二章「メーカーへの挑戦状」は、第1節「バリュー主義」、第2節「ユーズがあるところダイエーあり」、第3節「価格は小売商が決める」、第4節「コスト主義の価格理論」、第5節「メーカー保護の再販制度」、第6節「松下幸之助氏に期待する」、第7節「抵抗する流通新勢力」、第8節「流通革命は権力の交代」、第9節「流通支配権を握るもの」から成っている。

第三章「これが流通革命だ」は、第1節「食・衣で握った価格決定権」、第2節「販売力、販売力」、第3節「資本と商品と人と」、第4節「革命同盟軍の結成」、第5節「問屋は同盟軍に入れない」、第6節「ソビエトをつくろう」、第7節「長征三千里に学ぶ」から成っている。

第四章「ダイエーはかく進む」は、第1節「四十八年には流通界の王様へ」、第2節「スーパーの歴史」、第3節「チーピーストアからの脱皮」、第4節「グループ化が進む」、第5節「ムードで動くリース進出と合併」、第6節「百貨店、専門店、零細店」、第7節「次代の雄ショッピングセンター」、第8節「問屋はどうなる」、第9節「ボランティアは育たない」、第10節「一〇・七・三の安上がり経営」、第11節「レインボー作戦でチェーンを展開」から成っている。

第五章「人は現場で鍛える」は、第1節「革命的人間像」、第2節「私の経営者論」、第3節「行動する経営者」、第4節「経営者のビジョン」、第5節「想像する社員とは何か」、第6節「やる気を持続させる法」、第7節「現場主義に生きる」、第8節「ダイエー現場主義」、第9節「牛肉をつくる発想」、第10節「上方商法と現場主義」から成っている。

第六章「競争こそすべて」は、第1節「戦うダイエー」、第2節「戦いは攻撃あるのみ」、第3節「好敵手、西友ストア」、第4節「競争と自由化」、第5節「競争のなかで成長する米国チェーン」、第6節「競争精神と市民社会」、第7節「契約精神に徹しよう」、第8節「農本主義と自給自足主義」、第9節「はびこる古い法律」、第10節「消費者はめざめよ」、第11節「中内矛盾論の形成」、第12節「死線をさまよった戦争体験」から成っている。

## (2) 「わが安売り哲学 (抄)」

長が編纂した『経済の思想』には、中内「わが安売り哲学 (抄)」として、上の目次でいえば、第一章「めざすは消費者主権」の第3節「消費者は王様か」、第二章「メーカーへの挑戦状」の第3節「価格は小売商が決める」、第三章「これが流通革命だ」の第6節「ソビエトをつくろう」のみが収録されている。

「わが安売り哲学 (抄)」において、冒頭にあたる、第一章「めざすは消費者主権」の第3節「消費者は王様か」—①は、以下のように始まる。

ダイエー憲法がめざすところは、消費者のための企業である。企業という企業が言葉の真の意味で消費者のために存在したとき、消費者社会が実現する。消費者主権の社会である。ダイエーが目標とするのは、消費者主権の確立された社会である。／消費者主権の思想は昔からあった。いまでも「消費者は王様、と称される。現実に消費者は王様であろうか?経済学の祖アダム・スミスは「消費者はすべての生産の唯一の終着地であり、目的である。生産者の利益は、それが消費者の利益を増進するに必要なかぎりにおいてのみ擁護されるべきである」(『国富論』)と述べている。ピグーの厚生経済学も消費者主権をめざしている。／理念としての消費者主権は語られても、現実はそのようではない。それゆえケネディ大統領は、ことあるごとに、「本来、消費者の権利は最も確立されねばならないにもかかわらず、最も保護されていないのが消費者である」と指摘していた。<sup>(10)</sup>

これに続く、第二章「メーカーへの挑戦状」の第3節「価格は小売商が決める」—②では、次のようになる。

マックス・ウェーバーは産業資本主義以前、つまり商業資本主義の段階を賤民資本主義と規定した。商人自らが利益追求行為を反道徳的なものと考えていた。ウェーバーの考え方は日本にも根強く、士農工商の封建的階級制度のもとに、商人は利益を

かすめる寄生虫的な存在として最下位におかれた。「屏風と商人は曲がらなければ立たない」、「嘘も手の内」、「商人は嘘で固まる」といった諺すらある。／商業が受動的であるとする規定、あるいは商人性悪説、いずれも生産者社会のなかで構成された誤りと偏見である。商品の循環過程において価値が実現するのは、小売店の店頭であり、この流通業者からの情報をもとに生産者はニーズのある商品をつくる。この過程をみれば、商業は生産された商品を引き渡す受動的なものという規定が、物事の一面しかとらえていないことがわかる。価値を増殖するという点では、生産者と対等の立場にある。一つの商品を生産するのに、流通業者は情報を提供し、生産業者は物理的な力を提供するという分業の関係である。／しかも価値を発掘するのは流通業者である。こうした主導的な立場にあるかぎり、価値の貨幣的な表現である価格は、流通業者が決定する権限を持たねばならない。本来、消費者が支払う価格は、消費者自身がそれぞれの需要度に応じて決めるものである。前にあげたサカエ薬品の例のように、経済活動を単純化して合理的に進めるためには、消費者に信任された流通業者が適正と認められる価格を設定すべきである。価格の設定はこの意味で代理行為である。<sup>(11)</sup>

そして、「わが安売り哲学（抄）」の終わりにあたる、第三章「これが流通革命だ」の第6節「ソビエトをつくろう」―③では、以下のように締め括られている。

流通革命のソビエト区も、主体的、客観的に条件の整った土地から建設されていくが、現時点では、大阪、神戸が最適の地とみる。特に関西人気質といわれるように、関西の消費者は伝統的に束縛されない自由な天地を求める自由な精神が強く、権威に媚びない気風を持っている。それが過去の労働争議にも、米騒動にも現われている。合理的なものを追求する姿勢は、昔もいまも変わらない。そんな風土のなかで関西のスーパーは育ち、安売りは関西、という定評ができています。神戸においては、消費者組織、あるいは地方公共団体の消費者施策も、他に比べて一段とすぐれている。流通革命のソビエトは、まず大阪、神戸に建設されるべきであり、やがて各地に広がっていくだろう。<sup>(12)</sup>

このように、「わが安売り哲学（抄）」は非常によくできた抄録である。中内の「流通革命」観をうまく抜粋し（纏め）ている。

特に、「価格は小売商が決める」―②における、「商品の循環過程において価値が実現するのは、小売店の店頭であり、この流通業者からの情報をもとに生産者はニーズのある商品をつくる」、「価値を増殖するという点では、生産者と対等の立場にある。一つの商品を生産するのに、流通業者は情報を提供し、生産業者は物理的な力を提供するという分業の関係である」、「価値を発掘するのは流通業者である」、「経済活動を単純化して合理的に進めるためには、消費者に信任された流通業者が適正と認められる価格を設定すべきであ

る。価格の設定はこの意味で代理行為である」といった文面に目をやると、前述の「『わが安売り哲学』でおもしろかったのは、流通の解釈」、「中内さんは、流通の生産性ということ、価値形成ということを強調している。私はこれは妥当だと思うのです」、「その流過程にはさまってくるさまざまなコストを合理化することが、はなはだ生産的な問題だということに着目している」という長による評価と、なるほど重なってくる。<sup>(13)</sup>

## 2 中内の「思い」と「想い」

### (1) 「鬼」への「思い」

以上のごとく、中内の「流通解釈」、すなわち「流通の生産性ということ、価値形成ということ」の強調、言わば「中内の『流通革命』観」は理解できた。

但し、筆者が強く興味を抱くのは、当時の、凄まじいまでのアグレッシブさ、現在の「Amazon効果」と通底するような「流通革命」観、これを支えた中内の「思想」にある。換言すれば、中内流「わが安売り哲学」の深層部に「存在」するものといえる。

こう考えたとき、「わが安売り哲学（抄）」には収録されていない、『わが安売り哲学』の第五章「人は現場で鍛える」第6節「やる気を持続させる法」に、筆者は注目するのである。

「やる気を持続させる法」には、こんなことが書かれている。

第一にまず目標をきめる。(中略) 第二に鬼になることを誓う。／目標に対する情熱をより激しくもつことによって鬼となるが必要である。／先制と集中とが兵法の根幹をなすように、集中はやる気を養成するために絶対不可欠である。いまの自分にないものを持つと思えば、その欲に徹しきることが、すなわち鬼となることである。鬼とは執念のかたまりであり、死後の人間の精神が墓の中で安らかに眠れずに化けて出てくるものをいうはずである。人間ではないことと、執念がこりかたまることがその要件である。／それには人間ばなれをすること——決めた目標に対して一途に情熱をもやし(一つの「思い」に限り一引用者)、その他のことは未練なく思いきる(その他の「思い」は切る一引用者)ことである。<sup>(14)</sup>

小市民的な家庭の幸福は犠牲にしなければならない。／決めた目標を手中におさめることにすべてをかける執念、それが鬼である。仕事の鬼、勝負の鬼、野球の鬼、相場の鬼、文学の鬼などといわれるような根性(根にある性<sup>さが</sup>一引用者)の持ち主になるためには、この執念が人並み以上に働く、鬼になるつもりがなければならない。(中略) 鬼のなかでも段階が上の鬼は体力、気力において他の鬼よりまさっていることが必要である。体力の充実が気力の充実に結びつく。青白いインテリといわれる夜行性の鬼よりは、ファイトに燃え自己の信念に生きようとする堂々たる態度の鬼とし

での体力、気力を持つことが必要である。／「私は過労で死んだ人を見たことはないが、そう思い込んだために死んだ人は多い」と米国の産業心理学者のチャールズ・メイヨー氏は言っている。体力・気力の充実のために働き抜くことから、技が実力になり、実力が気力を育てる。気力がさらに体力をいっそう強める。重荷を背負ってふみしめる一步一步のなかから新しい人間が生まれる。<sup>(15)</sup>

以上のように、「小市民的な家庭の幸福は犠牲にしなければならない」、「人間ばなれをすること——決めた目標に対して一途に情熱をもやし、その他のことは未練なく思いきる」、「ファイトに燃え自己の信念に生きようとする堂々たる態度の鬼」、「体力・気力の充実のために働き抜くことから、技が実力になり、実力が気力を育てる。気力がさらに体力をいっそう強める」、「重荷を背負ってふみしめる一步一步のなかから新しい人間が生まれる」と、中内は言う。

つまり、中内にとって、目標一途の（ファイトに燃えた、信念に生きる）「鬼」とは、「新しい人間」であったのだ。そして、中内には、「鬼（新しい人間）」への「思い（現在における未来の観方一期待、願い…執念）」があったといえる。

そこで、さらに考えたい。

この「思い（現在における未来の観方一期待、願い…執念）」を裏打ちする中内の「想い（現在における過去の観方一回顧、憂い…悲しみ）」（「執念の源」ともいえる）は、一体何であり、何処から来たものなのか。

これである。

## (2) 「鬼」の「想い」

中内の「想い」（「執念の源」）に関して、『わが安売り哲学』の第六章「競争こそすべて」第12節「死線をさまよった戦争体験」を見ていくことにする。この部分もまた、「わが安売り哲学（抄）」の方には、収録されていない。

中内は1941年12月に神戸高商を卒業し、日綿（現：双日）に入社した。その直後に、召集令状が来て、翌年の1月7日には満州の関東軍に送られることとなった。配属されたのは、ソ満国境の国境守備隊であり、兵科は野戦重砲兵であった。1944年になると、山下奉文の山下兵团に配属されることになり、フィリピンのルソン島リングエン湾沿岸で、中内は守備に当たることになる。翌年1月にリングエン湾に上陸した連合軍（アメリカ軍、オーストラリア軍）との転戦（ダモルチス→バギオ→キャンガン）が始まると、毎日のように中内らは夜襲を繰り返したという。<sup>(16)</sup>

重砲兵とはいうものの、実際は斬り込み隊である。／夜襲で傷ついたのが忘れもしない六月六日のことである。明け方の四時ごろ、オーストラリア軍の陣地を攻撃に行ったおり、敵の手榴弾を浴び、大腿部、腕はじめ、全身が傷だらけになり、これ

最期かと観念した。野戦病院に送られたが、病院とは名ばかり、ろくに医薬品もないどころか食糧もない。／大岡昇平の「野火」は、野戦病院から原隊に帰された兵隊が分隊長から病院に帰れとなぐられるところから始まる。病院も原隊も食糧がないので、足手まといの病人は自決を迫られる。「野火」と同じような生活が私にも始まった。ウジのわいた水牛の死骸をあさり、トラックのタイヤを燃やして野草を煮た。靴の皮に水を含ませて、ガムのようにかみ続けた。およそ食うことが可能な物はなんでも口にした。山蛭はいいほうだった。ノミとカとハエ以外はすべて食用になることを知った。「野火」に描かれているとおりでである。<sup>(17)</sup>

まさに、本稿「はじめに」で触れた「『戦争』という体験」、これに由来するところの「『生』への『執念（思い）』」。「『戦争』という体験」は、「『死生観』に関わる『想い』」を生じせしめる。この種の「想い」が、「執念（思い）」を裏打ちすることになるのは、言うまでもない。

極限状況のなかで、私は人生最大の哲学を体験した。“人間を信じること”である。病み傷ついたまま食物を求めながら共に歩く仲間も、いつ自分を殺すか知れない。疲れ果てて寝ているうちにやられる。それでも眠らないわけにはいかない。食われるか、眠られないまま逆上して自殺するかのいずれしかない。そのいずれをも避けるには、結局、友を信頼して眠るよりほかない。人間不信のなかで、人間信頼だけが生きる可能性をつなぐ。人間への絶対的不信の状況のなかから、人間を信頼しようという気持ちが生まれた。私は同僚のなかで眠った。食われてもいいではないか、友を信頼しよう——諦観だった。／徹底的な人間不信のなかから人間信頼が生まれる。これほど矛盾に満ちたことはない。人間の命をかけた矛盾であり、その矛盾のなかに命を投げ出すよりほかなかった。／中内は、「甘い」、「ラフだ」と指摘され、私自身そうだと思っている。そして、人間のやる気だけを信じている。戦争末期に体験した極限状況が、現在の私の核になっている。<sup>(18)</sup>

中内の「思い」、すなわち「鬼」＝「新しい人間」像は、実は以上のようなものだったのである。「“人間を信じること”」、「徹底的な人間不信のなかから人間信頼が生まれる。これほど矛盾に満ちたことはない。人間の命をかけた矛盾であり、その矛盾のなかに命を投げ出すよりほかなかった」、「人間のやる気だけを信じている。戦争末期に体験した極限状況が、現在の私の核になっている」という、自分を、その延長に他者をも含め、「人間」というものを信じるしかない「鬼」なのである。まさに「人間（じんかん）」、人と人の間（関係）について、命を賭して、極限において（一方的なものとなつたとしても）、徹底的に（最終的に）信じる故の「やる気の鬼」＝「新しい人間」。



努力の果てにすべてを投げ出したような、なげやりな気持ちである。そこに楽天主義も生まれてくる。こんな楽天性がないと、人間、生きられるものではない。／若いときから、人間は甘いほうだった。それが戦争によって確信となった。周囲からは甘さをたたかれようが、私からは甘さは脱け切らないだろう。楽天主義が、人間の可能性を信ずることになる。社員に対しても、この男はもっと力を持っているはずだと信じる。大メーカーとの対決も、やってみられないことはないと、自分の力に信頼し、全力を投入する。／ジャングルで靴の皮をかみ続けたために、私の歯は駄目になり、すべて義歯である。雨が降ると、腕と大腿部の傷がうずく。肉体がそうであるように、現在の中内功自身分解すると、ジャングルを彷徨したときの人生観が底辺にどっしりと横たわっている。<sup>(19)</sup>

筆者には、この中内の、『わが安売り哲学』（日本経済新聞社、1969年）執筆当時の、心的状況（「想い」→「思い」、すなわち、「想い（現在における過去の観方—回顧、憂い…悲しみ）」に裏打ちされた「思い（現在における未来の観方—期待、願い…執念）」が、『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ』で論じた「本田宗一郎像」と重なってくる（繋がっていく）、そのように感じられるのである。

そこで、『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ』で紹介した、本田の著作『スピードに生きる』（1964年）の一節を再掲する。

数年前になるが、私は『スピードに命を賭ける男』というアメリカ映画を見た。そのときの感動はいまだに忘れない。もっともその感動は、私なりのものであって、多くの人々に理解してもらえるかどうかはちょっと疑問である。（中略）まだ、私は自分の人生を顧みるというような大げさなことのできる年齢には達していない、人生五十年、教訓もなく劇的な波瀾もなかった。ただ平々凡々、オートバイのエンジンに取り組み、他愛のない悪戦苦闘をつづけてきただけである。しかし、それでいて、ただ一つだけいえることは、一本に打ちこめる仕事をしつづけてきたということである。／前述の映画の主人公が叫んだ言葉に、私の最も気に入った言葉があった。／『私と競争と、どちらを選ぶ?』と愛人に迫られたとき、彼がこたえた言葉である。／『自分が競争に打ちこんでいるのは、何も記録との闘いでもなければ、競争相手と争っているのでもない。俺は俺の生命を相手に闘っているのだ。競争に出なくて、どこに俺の生涯があるん!』／だそうだ。私もまた自らの生命の命じるがままに、生きてきたのであり、これからも生きていくであろう。<sup>(20)</sup>

これを、筆者は、本田が「ある種、『死生観』を語っている」とした。カーク・ダグラス演じるところの主人公による、「俺は俺の生命を相手に闘っているのだ」、という台詞。それに対し、本田は「私もまた自らの生命の命じるがままに、生きてきたのであり、これ

からも生きていくであろう」と返したからである。

『スピードに命を賭ける男』の主人公は、バスの運転手でありながら、自らの手で競走車を製作し、レースに出場するようになる。やがて、プロレーサーとなり、活躍もする。それこそ、スピードに命を賭ける、主人公の「情熱（執念）」は、次第に周りから、最終的には「最愛の人」からも、全く理解できない「恐ろしいもの」と見做される。主人公は、まさに「鬼」と化したのである。

本田は、「人生五十年、教訓もなく劇的な波瀾もなかった。ただ平々凡々、オートバイのエンジンに取り組み、他愛のない悪戦苦闘をつづけてきただけである」と、彼特有の「異常な謙虚さ」（筆者には、自虐的あるいは偽悪的とさえ言いたいところ）を見せながらも、「それでいて、ただ一つだけいえることは、一本に打ちこめる仕事をしつづけてきたということである」と言い切っている。

それは、「数年前になるが、私は『スピードに命を賭ける男』というアメリカ映画を見た。そのときの感動はいまだに忘れない。もっともその感動は、私なりのものであって、多くの人々に理解してもらえるかどうかはちょっと疑問である」、という引用文の冒頭に繋がる。「鬼」を理解できるのは、「鬼」だけである。

当時の、『スピードに命を賭ける男』の上映パンフレットには、萩昌弘が「カーク・ダグラスという俳優」という一文を寄せ、「常識からいえば、エゲツない、汚い、こういうエゴイスティックな仕事の鬼は本質的には善でも悪でもない、ある種の人間が宿命的に持たざるを得ない性格なのだ（中略）『スピードに賭ける男』のオート・レーサーにしろ、私は単に、そのうわべだけをみて、汚らしい人間だ、とか、逆に、俺も男ならああいう風に厚かましくいきやろう、などと考えるはならないでしょう」<sup>(21)</sup>、「何故現代がこのような人間の性格に共感と感心をもつのか？それは一口にはいいつくせませんが結局われわれ全世界が第二次大戦で人間の裸の心を汚いところまでいやというほど覗いてしまつたこと、そしてそれ以後の世界が、いや応なしに力と力による斗争場であること、したがって、現代に生きるわれわれは、好むと好まざるとにかかわらず、個人だけの世界で孤独になろうとする傾向があること——これらの風潮と無関係ではないでしょう」<sup>(22)</sup>と記している。

筆者は、「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ」において、「本田宗一郎」という陽気な天才を、映画『幕末太陽傳』（川島雄三監督）の、フランキー堺が演じた「居残り佐平次」を通じて、「黒い太陽」と評した。「黒い太陽」とは、普段キラキラとエネルギーに輝く太陽が、月の覆い被さりで見せる、瞬間の「本質」とでもいえようか（皆既日食）。月という「想い（裏打ち）」が前面に出てきたことで、却って「漆黒に燃える姿」を露わにする、太陽という「思い（執念）」の真の姿である。

### 3 「野火」の思想—中内功『流通革命は終わらない』（2000年）—

中内は、2000年になって、『流通革命は終わらない—私の履歴書—』を出版した。『わ

が安売り哲学』の出版以来、30年の時が経過していた。2冊目の単著となる。<sup>(23)</sup>

この本は、30頁にも亘る「とても長いあとがき—若者へのメッセージ」で終わる。この「あとがき」は、「対話から新しい時代を」、「人生とは自分と出会う旅」、「『野火』は今も燃えている」の3つの節に分かれている。最後の節、「『野火』は今も燃えている」の中で、中内は次のように述べている。

毎年、八月十五日、私は条件反射的のように、太岡昇平という作家が書いた『野火』という小説を書棚から取り出す。／たった百八十三ページの薄っぺらい本。その中に、三年八ヵ月に及ぶ太平洋戦争が凝縮されている。／人気のないオフィスで、本と向き合う。冷房の音だけが、かすかに響く。遠い記憶だが、敗残兵として、フィリピン山中を敵から逃げ回っていた時に聞いた正体不明の音のようだ。その不気味さに、まるで見えない敵に備えるかのように、思わず身をすくめる。／本を開くと、突然、肺病もちの部下に対する分隊長の激烈な言葉が、私の胸をつき、悲惨なフィリピン戦線が目の前に広がる。／「馬鹿やろ。帰れっていわれて、黙って帰って来る奴があるか」／「帰るところがありませんって、がんばるんだよ。そうすりゃ病院でもなんとかしてくれるんだ。中隊にゃお前みてえな肺病やみを、飼っとく余裕はねえ」／「どうしても入れてくんなかったら——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんじゃないぞ。それが今じゃお前のたった一つの御奉公だ」／「……」／まるで、私自身が、分隊長に死の宣言をされているような錯覚に陥る。(中略) 負傷した時、担架で私を連れて逃げてくれた戦友に感謝しつつも、いつみずてられるかわからない不安におののく。戦友を信じつつ、戦友を疑う。『人間信頼と人間不信の矛盾』。その葛藤の中で、まんじりともせず過ごした、あの闇夜が蘇る。<sup>(24)</sup>

「戦友を信じつつ、戦友を疑う。『人間信頼と人間不信の矛盾』。その葛藤の中で、まんじりともせず過ごした、あの闇夜が蘇る」。

この表現は、『わが安売り哲学』(1969年)の「死線をさまよった戦争体験」と比較し、同時に「30年の経過、中内ダイエーの置かれた立場の変化」を考慮すると、上の「月という『想い(裏打ち)』が前面に出てきたことで、却って輪郭を露わにする、太陽という『思い(執念)』の姿である」といった意味で、非常に興味深いものを感じる。

既述のごとく、1969年には「人間不信のなかで、人間信頼だけが生きる可能性をつなぐ。人間への絶対的不信の状況のなかから、人間を信頼しようという気持ちが生まれた。私は同僚のなかで眠った」と表現していたのである。

さらに続く。

主人公も同じ気持ちだったに違いない。部隊を追われ、病院からも見捨てられ、山中をさまよう。その時、行く手に、一筋の野火が立ち上る。／主人公はつぶやく。

「比島（フィリピン）人の観念は私にとって野火の観念と結びついている。秋の穀物の殻を焼く火か、牧草の再生を促すために草を焼く火か、あるいは私たち日本兵の存在を、遠方の味方に知らせる狼煙（のろし）か、部隊を離脱してからの孤独なる私にとって、野火はその煙の下にいる比島人と因果関係にある」

傷病兵として、一人の下士官として、私には、主人公のこの気持ちが、痛いほどわかる。／私は職業軍人である将校とは違う。戦争に行くのは嫌だった。その思いを押し殺して、現役兵として応召され、軍曹となって野火を見た。野火のもとに行けば、人間がいる。人間が恋しい。そこには、水がある。食べ物がある。人間らしい暮らしがある。／水をくれ！ 食べ物をくれ！ ゆっくり眠らせてくれ！／そこへ行って、人間らしい暮らしをしたい。でも、行ったら、敗残兵である私も主人公も、現地の農民に通報され、アメリカ軍に殺される。（中略）複雑な心境で、野火の複雑な風景を見る。そこには、日常があり、非常がある……。／あの時から五十五年——。私の心の中で、あの野火がいつも燃えている。<sup>(25)</sup>

1969年に「鬼になることを誓う」、「小市民的な家庭の幸福は犠牲にしなければならない」（『わが安売り哲学』の第五章「人は現場で鍛える」第6節「やる気を持続させる法」）と記していた中内が、「人間らしい暮らし」に言及している。その象徴が「野火」である。「複雑な心境で、野火の複雑な風景を見る」と、この「野火」の複雑さにも、中内は言及している。<sup>(26)</sup>

「野火のもとに行けば、人間がいる。人間が恋しい。そこには、水がある。食べ物がある。人間らしい暮らしがある」。

「野火とは、人間（じんかん、人の間）における流通範囲そのものを規定する」と、中内が捉えたとしてもおかしくない。野火が燃え広がることは、「流通革命で経済活動が拡大していく」ことに通じ、本稿「1 中内の『流通革命』観」の「(1)長幸男の『中内功評』」に記した、「『わが安売り哲学』でおもしろかったのは、流通の解釈。（中略）中内さんは、流通の生産性ということ、価値形成ということを強調している」、という長の指摘とも繋がって来る。

そして、「わが安売り哲学（抄）」の終わりにあたる、第三章「これが流通革命だ」の第6節「ソビエトをつくろう」の締め括り、「流通革命のソビエトは、まず大阪、神戸に建設されるべきであり、やがて各地に広がっていこう」、この流通革命のソビエト拡張こそ「野火の拡張」に擬することが可能であった。

中内は言う。

今の若者が生まれた時、すでに民主主義も、自由も、この国にあった。テレビも、冷蔵庫も、クーラーも、車もあった。なんでもあるのが当たり前の世の中で、ないのは「戦争」だけだった。／つい数十年前、自分の意志で戦争を拒否できなかつた人々

がいた。望郷の念を胸に、戦死した人々がいた。無差別の戦略爆撃で生を失った人々がいた。／敗戦を終戦と言い換えた国があった。／あの狂気とあの敗北とを、隠し続ける大人たちがいた。／若者は、それを知っているのか。知ろうと努力したのか。見て見ぬふりをしているのか。八月十五日とは、と問われたら、なんと答えるのか。「お盆だよ、そう、おじさん」で、すませるのか。／私は、けっして、「八月十五日」を忘れない。歴史というのは輪廻についての教科書である。何があったかを伝えるのは、私の仕事である。何があったかを学ぶのは、若者の仕事である。<sup>(27)</sup>

「今の若者が生まれた時、すでに民主主義も、自由も、この国にあった。テレビも、冷蔵庫も、クーラーも、車もあった。なんでもあるのが当たり前の世の中」、これは言うまでもなく、中内が目指したものであり、その実現にあたって、中内自らが果たした役割は大きかったはずである。「流通（野火）革命」の実践、流通革命のソビエト（野火-拡張）である。

「ないのは『戦争』だけだった」、ここが重要である。

「『日本の土壌から出てきた近代人』の理解とされれば、やはり『戦争』という体験が高度成長期『日本のビジネスマン（単に株主資本家や重役たちではなく、およそ経済組織に帰属する人々）の思想というものの中に探れる』ところの『意識・無意識に行動している基盤』（≡内面的生活態度）、ということになる。（中略）より正確に言えば、『戦勝に続く敗戦』という『新しい組合せ体験』が、日本の土壌に、時代を画する個人主義的、合理的な『近代人』を創った」という、本稿「はじめに」冒頭に重ねたい。

「『戦争』という体験」が「私の現在の核」ないし「底辺にどっしりと横たわっている」といえた「日本のビジネスマン」が未だ多勢を占め、活躍していた『わが安売り哲学』（1969年）の時代。その姿が絶滅へ向かっていた『流通革命は終わらない』（2000年）の時代（実際、中内は2001年にダイエーを去り、2005年にはこの世を去った）。「日本のビジネスマン」の「思想」、「意識・無意識に行動している基盤」（≡内面的生活態度）は、この間に、当然のごとく変質していったのである。<sup>(28)</sup>

『わが安売り哲学』（1969年）の「死線をさまよった戦争体験」と『流通革命は終わらない』（2000年）の「『野火』は今も燃えている」における、「表現」の比較に、「非常に興味深いものを感じる」のは、当然である。

中内の「『八月十五日』を忘れない。歴史というのは輪廻についての教科書である」という言が、胸に迫る。<sup>(29)</sup>

## おわりに

大岡昇平の『野火』は、以下のように締め括られていく。それは、筆者にとって、中内の、2005年以降の「言霊」のような気がしてならない。

人は死ねば意識がなくなると思つてゐる。それは間違ひだ。死んでもすべては無にはならない。それを彼等にいはねばならぬ。叫ぶ。／「生きてるぞ」／しかし聲は私の耳にすら届かない。聲はなくとも、死者は生きてゐる。個人の死といふものはない。死は普遍的な事件である。死んだ後も、我々はいつも目覺めてゐねばならぬ。日々に決斷しなければならぬ。<sup>(30)</sup>

長幸男が「本田宗一郎という人がいましたが、彼の書いていることや話していることはまったく巷の職人のおじさんが話をしているような調子ですけれども、その含蓄するところは実に合理的で、私は近代の合理的な倫理体系とつながる——表現が正確ではありませんが——ものがあると思います。ソニーの井深大と親友であった本田宗一郎という人は、日本の土壤から出てきた近代人だという気がします」と記していることを、本稿「はじめに」で触れておいた。

長にすれば、大方が認めそうな、「近代人—井深」と「巷の職人—本田」、この2人が親友関係にあったことが興味深い、というわけであろう。一見相反するタイプ、言わば、「近代」と「前近代」に分類されそうな2人である。ところが、2人の「本質」は同種であることに長は気付き（長は、当然ながら、それを「近代性—合理性」に求めている）、わざわざ本田を「日本の土壤から出てきた近代人」と呼んだものと考えられる。

筆者は、上の「本質」を、敢えて、長に沿って「近代性—合理性」と捉えたとしたら、それは「『戦争』という体験」に拠るものである、とする。

筆者は、論文「『日本の土壤から出てきた近代人』の思想Ⅰ」において、長が編纂した『実業の思想』（現代日本思想体系11、1965年）からも、『経済の思想』（戦後日本思想体系8、1971年）からも、「本田宗一郎」が抜け落ちていることについて指摘した。加えて、「長が、1990年代後半に至って、漸く『本田宗一郎』という人間（項目）に着目し、『日本の土壤から出てきた近代人』というイメージを見出すようになったこと、そこに、筆者は大変興味を憶える」とも記した。<sup>(31)</sup>

筆者は、本田の著作『俺の考え』（実業之日本社、1963年）を手始めに、本田『若いのちへの讃歌 得手に帆あげて』（わせだ書房、1962年）、本田『スピードに生きる』（実業之日本社、1964年）、本田・能村龍太郎・小佐野賢治・素野福次郎・永野重雄『経営のこころ（第10集）』（日本工業新聞社、1974年）。本田・石井威望・合田周平・江守一郎・岡部冬彦『技術者精神』（ダイヤモンドサービス社、1977年）、本田『私の手が語る』（講談社、1982年）。本田・竹村健一・牛尾治朗『日本が心配だ』（山手書房、1982年）。本田・田川五郎『本田宗一郎おもしろいからやる』（読売新聞社、1984年）、本田／講談社インターナショナル編『本田宗一郎は語る—不常識を非真面目にやれ—』（講談社、1985年）、本田『本田宗一郎 夢を力に 私の履歴書』（日本経済新聞出版社、2001年）、本田『やりたいことをやれ』（PHP研究所、2005年）、本田『ざっくばらん』（PHP研究所、2008年）…等々を参照しながら、本田の「言霊」を追いかけた。

「日本の土壌から出てきた近代人」という、長のイメージ、このイメージを、自分なりに（故人となった長に直接確認することはできない、が、自分次第で）把握しようとしたからである。

本田を追いかけることで、抑々「日本の土壌から出てきた近代人」という言い回し自体に、より一層興味を抱くようになり、「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想」と題して作業を進めた。その途上、長が見出した「本田—井深」とはまた別に、筆者自身が、本田と「どこか同じ匂い（日本の土壌から出てきた）」を感じた中内功について、本田に続けて（繋げて）追いかけてみようと思った。故に、本稿は、「日本の土壌から出てきた近代人」というもの自体に迫るための二歩目となった、と筆者は考えている。

この二歩目における、中内の「脳裡に『焼き付いた想い』と（そこから）『浮かび来し思い』について」、筆者自身、「道具」としての「思想」という行為を、充分に実践し得たかどうか、甚だ不安ではあるが、「現在」は、これでいい。<sup>(32)</sup>

## 注記

- (1) 篠崎尚夫「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ」、『金沢星稜大学論集』第47巻第2号、2014年3月、9頁。
- (2) 長幸男「私の学問形成の歩み」、同『石橋湛山の経済思想—日本経済思想史研究の視角—』東洋経済新報社、2009年、331頁、下線—引用者。  
筆者が院生であった頃、参加していた「比較経済史＝思想史セミナー」（於：立教大学）において、長先生が「私の学問形成」と題した講演をされた。この「私の学問形成」は、録音し、筆に起こされ、住谷一彦・和田強編『歴史への視線—大塚史学とその時代—』（日本経済評論社、1998年）に収録された。「私の学問形成」を、「私の学問形成の歩み」と直し、長先生没後、遺稿集『石橋湛山の経済思想』に再録されている。続けて、長先生は、「そんなことで、いま私がしなければならないことは、以前に筑摩書房の近代日本思想体系で『実業の思想』（一九六四年）というのを編纂いたしまして、それに一〇〇枚ばかりの解説をつけました。それは渋沢栄一から石橋湛山をカバーしているのですが、それをいまお話した内容を含めながらも一度考え直して、戦後日本の高度成長から今日にいたるまでのビジネスの思想を整理することなんです。ソ連社会主義の解体、超国家的巨大企業による市場のグローバル化、エレクトロニクスによる知識産業革命そのほか、大変革が急ピッチで進んでゆく中で、根源的な人間観または、エートスの問題は諸民族の対立抗争（大きくは文明の対立とみるものもある）をみても、容易に答えを出すことができない。それは一向に進んでいないというのが、私の現在の状況です」（同上、下線—引用者）と述べられた。
- (3) 長幸男編『実業の思想』（現代日本思想体系11）筑摩書房、1965年。『実業の思想』には、①渋沢栄一「青淵百話（抄）」（1912年）②鈴木梅四郎「実業家としての中上川彦次郎先生」（1927年）③武藤山治「実業読本」（1926年）④大内兵衛「偉大なる財界人」（1960年）⑤大河内正敏「資本主義工業と科学主義工業」（1937年）⑥同「農村の工業」（1934年）⑦同「農村の工村化」（1925年）⑧松下幸之助「私の行き方考え方」（1954年）⑨後藤安太郎「企業デモクラシー」（1953年）⑩深井英五「唯物史観の批判」（1932年）⑪太平洋問題研究会「軍備制限ならびに太平洋およ

- び極東問題に関する会議についての勧告」(1921年) ⑫石橋湛山「軍備縮小は財界を良化すべし」(1921年) ⑬同「軍事工業の転換策」(1921年) が収録されている。
- (4) 伊東光晴・長幸男編『経済の思想』(戦後日本思想体系8) 筑摩書房、1971年。『経済の思想』には、①石橋湛山「昭和二十一年度衆議院財政演説」(1946年) ②経済安定本部「経済実相報告書(附経済緊急対策)」(1947年) ③下村治「日本経済成長論」(1960年) ④「日経連第一回総会における宣言」(1948年) ⑤経済同友会「われらの覚悟(前文)」(1953年) ⑥「『日本生産性本部』設立趣意書」(1955年) ⑦小林茂「ソニーは人を生かす(抄)」(1966年) ⑧中内功「わが安売り哲学(抄)」(1969年) ⑨清成忠男「大企業体制の動揺と中小企業」(1971年) ⑩久野取「反独占の論理学」(1970年) ⑪竹内直一「新しい消費者運動の哲学」(1971年) ⑫高橋暁「くすり・ヘドロからの脱出」(1971年) ⑬都留重人「『経済研究』創刊のことば」(1950年) ⑭小宮隆太郎「日本における経済学研究について」(1960年) ⑮都留重人「経済における人間の復位」(1968年) ⑯稲田献一「所得分配の政治経済学」(1971年) ⑰村上泰亮「近代経済学の可能性と限界」(1971年) ⑱大塚久雄「政治的独立と国民経済の形成」(1961年) ⑲平田清明「ヨーロッパで考えたこと」(1968年) ⑳佐藤昇「革新勢力の構想力」(1960年) ㉑宇野弘蔵「マルクス経済学の経済理論をいかに把えるか」(1958年) が収録されている。
- (5) 前掲篠崎「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ」、10頁、下線一引用者。
- (6) 伊東・長「解題・対談 戦後経済の思想」、前掲『経済の思想』、21頁、下線一引用者。「思想というものは、元来、誤解に値するようなものでなければ古典性をもたないのであって、自分たちの問題を解決していくために自由に誤解し、自由に援用していくということが、実は個々人の人間のもつ思想というものの生きたおもしろさだ」という長の言葉は、まさに名言である。何故に、何某の「思想」を扱い、自ら、それについて、「思想」するのか、筆者自身、大いに考えさせられ、また勇気づけられるところである。
- (7) 同上、21～22頁、下線一引用者。1971年当時、長が「『わが安売り哲学』でおもしろかったのは、流通の解釈」、「中内さんは、流通の生産性ということ、価値形成ということを強調している」、「その流過程にはさまってくるさまざまなコストを合理化する」、「はなはだ生産的な問題だ」、「これは消費者の側からの新しい市場問題に対する接近だ」と評価した点は、決して「過去」のみならず「現在」、そして「未来」へと続く(展開し続ける)ものである。
- ユニクロの柳井正が、以下のように述べている(柳井「刊行に寄せて 流通業のスターよ、永遠なれ」、恩地祥光『中内功のかばん持ち』プレジデント社、2013年、6～8頁、下線一引用者)。

そのころは日本の小売業は全盛期だったのではないかと思います。戦後復興から日本経済の高度成長へと続き、小売業は日本のリーディング産業の一つだったと思います。ダイエー、西友、ジャスコ、イトーヨーカ堂、ユニー、長崎屋等の大手量販店が爆発的に成長した時期でした。／その時代の最大のスター、成長の立役者が中内さんだと思います。中内さんとダイエーは、日本の小売業に最大の貢献をされたのではないかと、特に、小売業の産業化、大型化に大きな功績があったと思います。まさに志や理想を持っていらした。／私は、その時代地方で商売をやっていたとして、小売業者にとって、中内さんは一つの目標だったわけです。次に中内さんがどんなことをされるのかということが、すべての小売業者の興味の的だったと思います。気宇壮大な中内さんの言葉を聞いているだけで、光り輝く未来があるように思いました。(中略) 中内さんはいろいろな言葉を残されましたけれども、その中で一番有名なのが『よい品をどんどん安く』という言葉です。この言葉は小売業の永遠のモットーなのではないかと思います。(中略) 中内さんは、お客さまのニ



ズがまずどこにあるのか、それを満たすための新しい商売とはどういうものなのか。それを毎日考えられていたのではないかと思います。メーカー主導の世界から消費者主導の世界の中へと作り変えようとされてきたわけです。／志半ばで亡くなられて本当に残念です。その遺志は、我々小売業者の後輩が引き継いで、必ず日本の小売業者を顧客優先のリーディング産業にしないとイケないと思います。

アマゾンが牽引する現在の「流通革命」（さらに→Amazon effect）も、1971年当時の長が中内に対して成した「評価」と同様、時代とともに（状況に対応しながら）展開（進化）してきたもの（さらに→現況に影響を与える存在ともなる）、と捉えることができる。「流通の未来」を考える上で、ブラッド・ストーン／井口耕二訳『ジェフ・ベソス 果てなき野望』（日経BP社、2014年）、城田真琴『デス・バイ・アマゾン』（日本経済新聞社、2018年）、クリス・アンダーソン／篠森ゆりこ訳『ロングテール』（早川書房、2014年）、同／高橋則明訳『FREE』（NHK出版、2016年）、同／関美和訳『MAKERS』（NHK出版、2012年）、レイチェル・ボッツマン、ルー・ロジャース／関美和訳『シェア』（NHK出版、2010年）、レイチェル・ボッツマン／関美和訳『TRUST』（日経BP社、2018年）、アレックス・モザド、ニコラス・L・ジョンソン／藤原朝子訳『プラットフォーム革命』（英治出版、2018年）等を参照してみたのだが、もし中内が生きていたら、何を想い、何を思うだろうか…。

- (8) 同上、下線一引用者。長と同様に1971年当時、伊東が「中内さんは、価格はわれわれが作るんだ、消費者が作るんだという。消費者主権の考え方を背景にしながら、メーカー、特に寡占化してくるメーカーに対する対抗力を打ち出そうとする」、「流通過程の中に生れてくる大販売組織が成立するためには安売りをせざるをえず、そのために大量に安く仕入れる。これが大企業、大寡占メーカーに対する対抗力を形成する」、「これが国家の何の保護も受けていない。しかし、経済合理性をもって、これが戦後資本の中に、だんだん巨大な力となっていく、銀行もこれを無視できなくなってきたというところがおもしろい」と指摘した点、これも、70年代以降、80年代、90年代、2000年代…と過ぎ行くことの成り行きを「想う」、と同時に未来を「思う」という行為を、現在（今）すれば、様々なことが観えてくる。例えば、「国家の何の保護も受けていない。しかし、経済合理性をもって、これが戦後資本の中に、だんだん巨大な力となっていく、銀行もこれを無視できなくなってきた」という1971年の文面から、その2、30年後に起こった中内ダイエーの事態、所謂、昨今流行った「後付け式『バブルの生成と崩壊』関係論」からは見出せない「本質」を理解する上で、今から半世紀ほど前の「長・伊東対談」が役立つとは……。ただ、ただ敬意を表するばかりである。

長が、「さて、先ほどもダイエーに関して、金融の問題が出ましたけれども、戦後日本の経済にはたした金融の役割というのは、非常に大きいと思うのです。とりわけドッジ・ライン以降、均衡財政でやってきて、四十一年になって長期債発行ということになりましたが、この日本経済の再建過程、高度成長過程ではたした、いわゆるオーバー・ローンによる金融の力というのは無視できないし、それが、一概に近代的西ヨーロッパ的金融パターンでなかったからいかんという批評は、あまり意味がないと思うのですけれども」、(同上、25頁、下線一引用者)という、これまた、非常に興味深い発言をしている(2014年10月31日現在、非常に参考になった)。これに対し、伊東も「西ヨーロッパ的に、商業銀行の健全主義でやっていたら、日本は成長しなかったですよ」(同上、25～26頁、下線一引用者)と応じている。

さらに、長は、「問題は、そこで、ここ(前掲『経済の思想』一引用者)に収録した都留重人さんの『経済における人間の復位』ですけれども、これの一つの中心点は金融問題になって

いますね。金(かね)というは、文字通り非人格的なものであって、量的なものでしかはかれない。これが実は、高度成長という量的な指標での日本経済の推進の担い手であった。ところが、金融なるものが、はたして人間にとってゆたかな社会を作ったかどうかということについて、真正面から挑戦した文章だと思うのです。／この中に含まれている利子などに対する考え方は、ケインズの「金利取得者の安楽往生」と投資の計画化(社会化—引用者)の視点を日本の銀行制度につきつけたものであって、はなはだユニークで、現在の金融を商売にしている人の利子概念をはみ出していく展望をもっていると思うのです。長期的には、金融というもの、つまり資金を通じて資源、労働力の再分配をしていくという社会的機能を考える場合に、都留さんの提起した問題は、やはり重要な意味を含んでいると思うのですが(同上、26頁、下線—引用者)とも発言している(これらのやり取りもまた、2014年10月31日現在、非常に参考になった)。重ねて、敬意を表するものである。

- (9) 中内功『わが安売り哲学』日本経済新聞社、1969年、6～9頁を参照。
- (10) 同上中内『わが安売り哲学』、19頁、下線—引用者。前掲伊東・長編『経済の思想』(「わが安売り哲学(抄)」を所収)、148頁、下線—引用者。
- (11) 同上『わが安売り哲学』、31～32頁、下線—引用者。同上『経済の思想』、151頁、下線—引用者。
- (12) 同上『わが安売り哲学』、88～89頁、下線—引用者。同上『経済の思想』、153頁、下線—引用者。但し、『わが安売り哲学』文中の「合理的なものを追求する姿勢は、昔もいまも変わらない」(圏点—引用者)が、「わが安売り哲学(抄)」では「合理的なものを追求する姿勢は、今も変わらない」(圏点—引用者)となっている。
- (13) 再度、本稿の注(6)～(8)を参照されたい。長幸男ならではの、「学者(まなぶもの)の妻さ」というものが、わかってくる。
- (14) 前掲中内『わが安売り哲学』、148～149頁、下線—引用者。
- (15) 同上、149～150頁、下線—引用者。
- (16) 同上、211～212頁を参照。
- (17) 同上、212～213頁、下線—引用者。
- (18) 同上、213頁、下線—引用者。
- (19) 同上、214頁、下線—引用者。
- (20) 本田宗一郎『スピードに生きる』実業之日本社、1964年、13～14頁、下線—引用者。
- (21) 萩昌弘「カーク・ダグラスという俳優」、『スピードに命を賭ける男』(有楽座パンフレット No.55-8) 東宝、1955年5月13日、7頁、下線—引用者。
- (22) 同上、8頁、下線—引用者。
- (23) 『わが安売り哲学』(1969年)と『流通革命は終わらない』(2000年)の中間といえる1984年に、編者として中内は『小林一三経営語録』を刊行している。巻末に、「事業家小林一三のこと」と題した、中内による12頁ほどの解説がなされている。以下に、その一部を示す。

「『……この世の中に私ぐらゐ幸運な人はあるまいと信じてゐる。若いときからわがままで、放縦の生活をして、傍若無人に暮して来たにも拘らず、憎まれっ子世にはばかるとでもいはれさうで、私の仕事は大体において成功してゐる。(中略) 全体私の短所は、軽率で、それがどう響かうと、相手方がそれをどう感じやうと、さういふことには無頓着に、端的に直ちに結論に達せしむるのであるから、持って廻って、四方八方をうまく収めて、それから徐ろに計画を大成せしむるといったやうな、深慮遠謀は棄にしたくてもないので、(中略) 幸運なる私は、私の仕事においても二十年来ほとんど独裁専制でやって来た。その独裁専制において大過なき

のみならず、時代の尖頭を進み得た第一の理由は、私の方針が仮りに間違っただけとして、どこまでもそれをなし遂げ得るまで、私の同僚とその一党の諸君が、是が非でも助けてくれたからである。これに反して、いかに名案良策であるとしても、一致協同の精神がないのみならず、陰からケチをつけて失敗せしめようとする世間の多くの寄合ひ世帯を大観するとき、私ぐらゐ思ふままに仕事を実行し得る位置に泰然としてをり得る人はほとんど稀れであると感謝してゐる。(中略) 私の一番嫌ひなものは偽善家だ。私はどういふわけかこの偽善家に非常な反感を持ってゐる。人一倍憎らしく思ふ』／逸翁小林一三が昭和五年の年頭(当時五十七歳)に自らの半生涯を顧みて発表した『私から見た私』の一部分を抜粋してみた。／この時期は十数年務めた三井銀行を辞めてから二十年余が経っており経営者としての小林が得意の絶頂にある頃だ。(中略)ところが、成功した人間が時に陥り易い傲慢とか奢りとかいったものがこの『私から見た私』には見られない。何故か。これは多分、小林の目の問題、いわゆる観察眼のなせる業だろう。絵心のある人は成そうとして成らぬ自画像を描くことの難しさや壁に何度もぶつかるものであるが、この『私から見た私』には、ものごとを、そして自分自身を貫いて見る眼の厳しさがある」(中内功編『小林一三経営語録』ダイヤモンド社、1984年、191～192頁、下線一引用者)。

そして、次のように締め括る。

『『小林一三経営語録』の上梓に際し、再び全集(『小林一三全集』全7巻、ダイヤモンド社、1961～1962年一引用者)をめぐり、関連著作にも眼を通して見た。その読後感を一言でいえば、二十数年前に読んだ時と全く同じ『さすがだなあ』である」(同上、203頁、下線一引用者)。

1922年生まれの中内が、『小林一三全集』を初めてめぐったのは40歳の頃、そして次にめぐって上記解説を書いたのは62歳。

『わが安売り哲学』(1969年)の67歳、『流通革命は終わらない』(2000年)の78歳に、中内は、どんな心持でめぐったものか、またはめぐらなかつたものか…。

これらの時期を中内(ダイエー)の歩みに重ねて考えることは、非常に興味深い。

『わが安売り哲学』(1969年)の場合と異なり、中内功が中内「功」となっている。「力」が「刀」になっている。「力を抜かない刀」とでもいうことか。

(24) 中内功『流通革命は終わらない—私の履歴書—』日本経済新聞社、2000年、224～226頁、下線一引用者。

(25) 同上、226～227頁、下線一引用者。

(26) 野火→焼畑→拡大再生産(拡大循環)≡中内→流通範囲の拡張→GDP↑(拡大循環)、野火による農業革命から中内の「流通革命の本質」を類推。野火とは、人間(じんかん)における流通範囲そのものを規定する、野火が燃え広がるのは、流通革命で経済活動が拡大していくことに通ずる、と言えまいか。

「野火」について、筆者なりに考えた。すると、ふと、宮本常一のことを思い出した。

「これまで日本における生産構造のうち、もっとも古い基盤になっている狩猟・漁撈・採取文化の上に、漁撈・稲作文化がどのように伝来し普及定着していったか(中略)いまひとつ重要なことを説き落としてゐる。それは畑作である。畑作の技術がどのように発達して来たかということ、もっともわかりにくいといつていい。しかし非常に重要な生産構造であった」(宮本常一「日本における畑作の起源と発展」、同『日本文化の形成』講談社学術文庫、2005年、108頁、下線一引用者)。

「焼畑は、狩猟・採取の延長として発生したものではないかと考えるようになった。／焼畑は多くの山の中腹から上の緩傾斜面でおこなわれているが、火山地方では山麓にも見られる。

そのはじめは、おそらくそこをおお掩っている木を焼き払うことによって、森林の中にひそむいのしし猪や鹿を野へ追い出し、捕えることもあっただろうし、木立になっていないところに追い出した野獣はまきがり巻狩をすることも容易であったと考える。そのようにして木立を焼くことは少なくなかったと考えるが、その焼跡に生えたものは食糧として利用できるものが少なくなかった」(同上、2005年、109頁、下線一引用者)。

「つまり山を焼くことによって野獣を捕まえるのに便利であるばかりでなく、焼跡には食糧に適する植物の生育も見られたのであろう。そうした経験が、焼いたあとへ一定の植物の種子をまいたり、あるいは根菜を植えるような作業を生み出していったのではないかと思う。このようにして山の頂近いところでも山を焼くことから植物の食糧化が進み、生活をたててゆくこともできるようになっていったのではないかと思う。そのような体験の積み重ねが、焼いたあとの地面を植物栽培に利用するようになっていったのではなかろうか」(同上、2005年、110頁、下線一引用者)。

そして、「全国レベルで(マクロ)でも、地域(ミクロ)でも、大型店は飽和状態に達している。それにもかかわらず、地域振興の御旗を掲げて大型店を誘致したり、積極的な誘致活動をしないまでも土地利用規制を緩和するなどして大型店進出に誘い水を提供する地方自治体があとを絶たない」(矢作弘『大型店とまちづくり—規制進むアメリカ、模索する日本—』岩波書店、2005年、11頁)。

さらに、「画一的な表情と動きでどこもなく徘徊する無数のゾンビたちとは、まぎれもなく郊外の消費社会における消費者のメタファーにほかならないだろう。(中略) たんなるホラー映画に野暮な解説はやめることにしよう。しかしこの映画には、確実にショッピングセンターに象徴される郊外の消費社会の悪夢のようなものが存在する。人間が消滅しても郊外のショッピングセンターだけが商品を溢れさせたままで、無人のままで存在している。消費者のいない商品だけが生々しくそこに置かれている。モノと人間の乖離が始まっている風景のようでもある。(中略) 農耕社会の村の風景から始まって、私たちの戦後の日本社会はとうとうこんなところまでできてしまったのだ。そして高度資本主義消費社会の紡ぎ出す豊かさの背後に潜む悪夢をもとに生きるべく、私たちは宿命づけられたのである」(小田光雄『〈郊外〉の誕生と死』青弓社、1997年、249頁)。

- 中内が見たとおり、確かに、「野火」→「焼畑の拡大、すなわち流通革命」は「複雑」である。
- (27) 前掲中内『流通革命は終わらない』、227～228頁、下線一引用者。
- (28) 「日本のビジネスマン」の「思想」、「意識・無意識に行動している基盤」(≡内面的生活態度)は、2030年頃までには、一体どうなっていくのか。想像してみると、何故か、ワクワクしてくる。
- (29) 「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ」でも触れたように、本田の代表的著作『俺の考え』は1963年9月10日発刊であるが、その「まえがき」には「一九六三年八月十五日 / 本田 宗一郎」と記されている。本田の悲願「四輪車進出」を阻むことにもなる、戦時統制的な「特定産業振興臨時法案(特振法案)」の国会提出、審議(1963年3月～)、それを意識して、「終戦記念日」の「八月十五日」を日付に持ってきたのであろう。中内同様、本田にとっても、『八月十五日』を忘れない。歴史というのは輪廻についての教科書である」。

「もはや戦後ではないという流行語があったが、キャッチフレーズとしてはなかなかよくできていた。しかし、日本の産業界にあっては、はじめから戦後などなかったのである。いくら内容は変わったろうが、戦前、戦中の甘い夢がゆらゆらと揺曳していたまでのことだ。／資本か権力か、なにか保護するものがなければ企業は成り立たない、と考える。戦時中は敷地も建物も機械も、ひどい時には工員数までが割り当てられた、技術や生産にあまり関係がなく。

そして、その敷地や工具数の大小で企業はランクづけられていた。／この奇妙なものの見方は戦後も続けられ、自己のペースに合わない設備投資が、歌の文句ではないが『あいつがやるから俺もやる』で滅茶苦茶に行われた。これなんか、戦時中の割り当てが、ちょっと形を変えて競争意識にかわったまでのことなのである。／私はこれを企業の『石頭』とよぶことにしている。石頭はやはり軍国主義時代の喜べない遺産だ。あの時代には必要だったかも知れない。しかし、現代のようなスピードのある時代には無用のものである。いや無用というより、かえって害になる。ところが、なんと石頭的経営者が多いことか。／国産愛用は、いわばこの石頭の発想なのである。戦争中もさかんにとなえられた。そしてそれなりに意味をもったが、今日の自由な時代に、どうして国産品を愛用せねばならぬのか、私はやっぱり解せない。／私などもともと国産品を愛用している、いわゆる「愛国者」だった。それで結構、満足していたのだが、近ごろのように、国産品愛用が叫ばれだすと、では舶来品はどのくらいいいものなのだろうかと、逆に考えだすようになって、私は二、三日の日用品を買ってみることにした。使ってみて、なるほどこれはいいものだ、改めておのれの不認識を恥じたものだ。／いい格言をお教えしよう。「雉子も鳴かずば撃たれまい」。余計なことをいい出したばかりに、私という一人の買手をメーカーは失ったことになる。／これが需要供給というものである。需要というものは、はじめからあるものではない。割り当てられるものではない。需要は、メーカーがアイデアと生産手段によってつくり出すものだと考える。／もちろん、需要がゼロの市場へ、大衆が好み、関心を示す商品を作って送り出し、需要をつくりだす、ということは、石頭の企業からみれば、これほど危険なことはないだろう。だが、それが貿易の自由化というものだ。そのために、石頭は早く改造する必要がある。コチコチの石頭は、まずこの石頭自体をぶち壊さねばならない。甘い記憶を叩き出さねばならない。そして生き生きした頭に転換すること。さもなければ、私はここで極論したい。下手に国産品愛用などといったスローガンでごまかしていると、再び軍国主義の時代を作り出すことにはほかならないのだ（本田宗一郎『俺の考え』実業之日本社、1963年、174～176頁、下線一引用者）。

- (30) 大岡昇平『野火』創元社、1952年、下線一引用者、186頁。さらに、「暗い空に一際黒く、黒曜石のやうに、黒い太陽が輝いてゐた。しかしもう遅い。／草の中を人が近づいた。足で草を掃き、滑るやうに進んで来た。今や、私と同じ世界の住人となつた、私が殺した人間、あの比島の女と、安田と、永松であつた。（中略）思ひ出した。彼等が笑つてゐるのは、私が彼等を喰べなかつたからである。殺しはしたけれど、喰べなかつた。殺したのは、戦争とか神とか偶然とか、私以外の力の結果であるが、たしかに私の意志では喰べなかつた。だから私はかうして彼等と共に、この死者の國で、黒い太陽を見ることが出来るのである。／しかし銃を持った墮天使であつた前の世の私は、人間共を懲すつもりで、實は彼等を喰べたかつたのかも知れなかつた。野火を見れば、必ずそこに人間を探しに行つた私の秘密の願望は、そこにあつたかも知れなかつた」（同上、186～187頁、下線一引用者）となり、「もし私が私の傲慢によつて、罪に墮ちようとした丁度その時、あの不明の襲撃者によつて、私の後頭部が打たれたのであるならば——／もし神が私を愛したため、豫めその打撃を用意し給うたならば——／もし打つたのが、あの夕陽の見える丘で、飢ゑた私に自分の肉を薦めた巨人であるならば——／もし、彼がキリストの變身であるならば——／もし彼が真に、私一人のために、この比島の山野まで遣はされたのであるならば——／神に榮えあれ」（同上、187～188頁、圈点一引用者）というように、『野火』は終わる。中内は、どのような気持ちで、この結末部分を、晩年の8月15日に読み返したのであろう…。

大岡は、中内の『わが安売り哲学』（1969年）の2年後（『野火』発刊から19年後となる1971

年)、二段組み700頁に及ばんとする、大著『レイテ戦記』の中に、次のような「想い」と「思い」を記している。「口では必勝の信念を唱えながら、この段階では、日本の勝利を信じている職業軍人は一人もいなかった。ただ一勝を博してから、和平交渉に入るといふ、戦略の仮面をかぶった面子の意識に動かされていただけであった。しかも悠久の大義の美名の下に、若者に無益な死を強いたところに、神風特攻の最も醜悪な部分があると思われる。／しかしこれらの障害にも拘わらず、出撃数フィリピンで四〇〇以上、沖縄一、九〇〇以上の中で、命中フィリピンで一―一、沖縄で一三三、ほかにほぼ同数の至近突入があったことは、われわれの誇りでなければならない。／想像を絶する精神的苦痛と動揺を乗り越えて目標に達した人間が、われわれの中にいたのである（「想い」―引用者）。これは当時の指導者の愚劣と腐敗とはなんの関係もないことである。今日では全く消滅してしまった強い意志が、あの荒廃の中から生れる余地があったことが、われわれの希望でなければならない（「思い」―引用者）」（大岡『レイテ戦記』中央公論社、1971年、158～159頁、下線―引用者）。

大岡の「『野火』（1952年）～『レイテ戦記』（1971年）の19年間」、中内の「『わが安売り哲学』（1969年）～『流通革命は終わらない』（2000年）の31年間」、これらの経緯に興味を抱くのは、筆者だけであろうか。

- (31) 「『日本の土壌から出てきた近代人』の思想Ⅰ」においては、日活映画『幕末太陽傳』（1957年）の脚本冒頭「本稿は、幕末動乱期の品川の―青楼を舞台に、例えば『首がとんでも動いてみせるわ』と言つた、一種庶民の持つ生命力と、反面人間の生きる哀しさといつたものを、喜劇の形で描こうとしたものだが、うまくいくかどうか、それは判らない」（今村昌平・川島雄三・田中啓一「幕末太陽伝」、シナリオ作家協会編『年鑑代表シナリオ集 1957年版』三笠書房、1958年、153頁、下線―引用者）に注目し、主人公の「居残り佐平次」と本田とを重ね合わせ考察した。「石頭の空兵衛」（常識、体制、権威…等の象徴？）から逃れるラストシーンが何ともいえない。「空兵衛『こら、嘘ベエこいてると、地獄さ落ねばなんねえど！』／佐平次『ええ、地獄も極楽もあるもんか、おいら未だ未だ生きるんでえ！（未だ未だ来ない「未来」―引用者）』／空兵衛『これ！』／鐘の音。／朝ぼらけの往還／振分け荷物を肩に、トットと遠ざかつてゆく御発足の佐平次。／往還の彼方、品川の海に、まさに太陽は昇ろうとして――」（同上、193頁、下線―引用者）で終わる。「朝ぼらけの往還」、「往還の彼方…」という説明（ト書き）。「『往還』とは此岸（この世）と彼岸（あの世）の『往還』を意味するものであろう。／『戦争』を体験したものの表現である」ということを筆者は再論しておく。「黒い太陽」（燃え尽きるほどに激しい《哀しい》太陽《月との合体》）、「居残り佐平次」像は本田のみならず、中内とも重なってくる。
- (32) 本田も、中内も、亡くなっている。長先生も、亡くなっている。が、彼らの描き、書き残したものの、つまり彼らの「言霊」は決して消え失せない。彼らが残していった「言霊」に気付き（読み）、是非はともかく、「彼らの『思想』」を理解しようとするかどうか。この行為自体が、「戦後」（＝過去－想い）ではない「今後」（＝未来－思い）の、「問題を解く鍵」というより、「状況に対応していくため、現在なすべき、我々の『道具』としての『思想』（思想は決して目的ではない）」に繋がる、と筆者は付け加えておく。